

# 雪の夜

小林多喜二

青空文庫



仕事をしながら、龍介は、今日はどうするかと、思った。もう少しで八時だった。仕事が長びいて半端な時間になると、龍介はいつでもこの事で迷った。

地下室に下りて行って、外套箱がいとうばこを開あけオーバーを出して着ながら、すぐに八時二十分の汽車で郊外の家へ帰ろうと思った。停車場は銀行から二町もなかった。自家うちも停車場の近所だったから、すぐ彼はうちへ帰れて読みかけの本が読めるのだった。その本は少し根氣の要いるむずかしいものだったが、龍介はその事について

今興味があつた。彼には、彼の癖として何かのつまずきで、よくそれつきり読めずに、放つてしまう本がたくさんあつた。

龍介はとにかく今日は真直まっすぐに帰ろうと思つた。

宿直の人に挨拶あいさつをして、外へ出た。北海道にめずらしいベタベタした「暖気雪」が降つていた。出口にちよつと立ち止まつて、手袋をはきながら、龍介は自分が火の気のない二階で「つくねん」と本を読むことをフト思つた。彼はまるで、一つの端から他の端へ一直線に線を引くように、自家へ帰ることがばかばかしくなつた。彼は歩きだしながら、どうするかと迷つた。停車場へ来るとプラットフォームにはもう人が出ていた。

龍介はポケットに手をつつこんだままちよつと立ち止まつた。

その時汽笛が聞えた。それで彼はホツとした気持を感じた。彼は線路を越して歩きだした。後で踏切りの柵さくの降りる音がして、地響が聞えてきた。

龍介は図書館にいるTを訪ねてみようと思った。汽車がプラットフォームに突っ込んできた。振り返ってみると、停っている列車の後の二、三台が家並の端から見えた。彼はもどろろか、と瞬間思った。定期券を持っていたからこれから走って間に合うかもしれない。彼は二、三步もどった。がそうしながらもあやふやな気があった。笛が鳴った。ガタンガタンという音が前方の方から順次に聞えてきて、列車が動きだした。そうなってしまうと、今度はハッキリ自家へ真直に帰らなかつたことが、たまらなく悔い

られた。取り返しをつかないことのように考えられた。龍介は停車場の前まで戻ってきてみた。待合室はガランとしていてストーヴが燃えていた。その前に、印しるしも何も分らない半纏はんてんを着て、ところどころ切れて脛すねの出ている股引ももひきをはいた、赤黒い顔の男が立っていた。汚れた手拭てぬぐいを首にかけていた。龍介は今度は道をかえて、賑にぎやかな通りへ出た。歩きながら、あの汽車で帰ったら、もう家へついて本でも読めたのに、と思った。が一方、そういうのはつきりしない自分をくだらなく思った。そしてこんなことはすべて、彼は恵子との事から来ていると思った。が龍介は頭を振った。彼にとって、恵子との記憶は不快だった。記憶の中に生きている自身があまり惨みじめに思えたからだだった。

その通りはこころもち上りになっていて、真中を川が流れている。小さい橋が二、三間おきにいくつもかけられている。人通りが多かった。明るい電燈で、降ってくる雪片が、ハッキリ一つ一つ見えた。風がなかったのも、その一つ一つが、いかにものんきに、フラフラ音もさせずに降っていた。活動常設館の前に来たとき入口のボックスに青い事務服を着た札ふだうり売の女が往来をぼんやり見ていた。龍介はちよつと活動写真はどうかろうと思った。が、初めの五分も見れば、それがどういうプロセスで、どうなつてゆくか、ということがすぐ見透くみえす写真ばかりでは救われれないと思つた。しかし今ここに來ているちよつと評判のいい最後のだけ見たい氣になつた。戻つて入つてしまふか、「入つてさえしまえば」

こんな気持ちにきまりがつく、そう思った。が、そんなことを意識してする自分が、とうとう惨めに考えられた。彼はよした。

龍介は賑やかな十字街を横切った。その時前からくる二人をフト見た。それは最近細君を貰った銀行の同僚だった。彼は二人から遠ざかるように少し斜めに歩いた。相手は彼を知らないで通り過ぎた。ちよつと行つてから彼は振りかえつてみた。二人は肩を並べて歩いてゆく。やつてやがると思った。が振りかえつた自分に赤くなつた。

図書館は公園の中にあつた。龍介は歩きながら、Tがいなかつたら、また今晚は変に調子が狂うかもしれないと思つた。そう思うと何んだかないかもしれない気がしてきた。が図書館の入口



の電燈が見え始めた時彼は立ち止まった。なぜ自分はこう友だちのところへ行くのか、と考えた。友だちを訪ねることが何か自分の気持にしつかりしたところのないことから来ており、それが友だちにハッキリ見られる気がした。

——入って行って、「遊びに来た」と言う。その時相手がいかにも落着いた態度で出てきたら、手にペンでも（本でもいい）持つて出てきたら、その時こそ惨めな自分が面と面を突きあわすことを露骨ろこつに感ぜさせられるだろう。それにはかなわない。

——上りになっていた道をむしろ早足で歩いてきたので身体が熱かった。Tのいる室に明るく電燈がついているのが見えた。そこで机の前に坐り、外のことにはちつとも気を散らさずに、自分

の仕事をしているTがすぐ想像できた。そんなところへこのあやふやな気持を持ってゆき、それをゴマかすためにでたらめをむちやくちやにしやべる！ とんでもないことだ！ ことごとくにこんな自分が情けなく思った。彼は戻りかけた。しかしもう気持が、寄れないところへ行っていた。彼は別な、公園の道に出た。そこは市役所の裏で暗かった。道の両側には高い樹が並んで立っており、それが上の方で両方枝を交えていた。そして、まだ落ちていない葉にさわる雪のかすかな音が、ずうと高い所から聞えた。

龍介はもう一人、画をかくSに会いたかった。しかしこれからすぐ停車場へ行けば九時十分の汽車に間に会う。それからでも家うちで何か勉強できる気がした。とにかく気持をどツか一方へ落着か

せたかった。

## 二

高台になつてゐる公園からは街がまち一眼に見えた。一番賑やかな明るい通りの上の空が光を反射していた。龍介は街に下りる道を歩きながら、

——俺はいつたい何がしたいんだろう、と考えた。しかし分らなかった。分らない？ フンこんなばかな理窟の通らない話があるか、そう思い、龍介はひと独りで苦笑した。

龍介は街に入ると、どこかのカフェーに入って、Sに電話をか

けてみようと思った。が彼の通つてゆく途中の一軒一軒が、彼を素直な気持で入らせなかつた。結局、彼は行きつけの本屋に寄つて、電話を借り、Sにかけた。交換手がひっこんで、相手が出る、その短い間、龍介は「いてくれれば」という気持と「かえつていないでくれれば極りがつく」という気持を同時に感じた。相手が出ぬ前、受話機をかけてしまふかと思ひ、ためらつた、がその時電話口にSの妹が出た。Sはいなかつた。彼はがっかりした。今晚はまただめになつたと思つた。

本屋を出たとき龍介は、ギョツとした。——恵子だ！ 明るいところからなので、視覚がハツキリしなかつた。が、電気のようにピリンとそういう衝撃が来た。龍介には見なおせなかつた。見

なおすよりもまず自身を女からかくす、それが第一だった。彼は暗がりへ泥<sup>ぬかるみ</sup>濘をはね越すように、身を寄せた。――が恵子ではなかつた。ホツとすると、自分が汗をかいていたのを知つた。ひとりで赤くなつた。

龍介は街を歩く時いつも注意をした。恵子と似た前からくる女を恵子と思い、友だちといつしよに歩いていたときでもよくきゆうに引き返して、小路へ入つた。恵子は大柄な、女にはめずらしく前開きの歩き方をするので、そんな特徴の女に会うと、そのたびに間違つてギョツとした。不快でたまらなかつた。

龍介の恵子に対する気持はいろいろな経過をふんでからの、それから出てきたものだった。かなり魅惑のある恵子が、カフェー

の女であるということから受ける当然の事について気をもみだした、それが最初であつた。彼はそういう女がいろいろゆがんだ筋道を通つてゆきがちなを知つていた。その考えが少しでも好意を感じている恵子に來たとき、「ちよつと」平氣でおれなかつた。この平氣でおれない「関心」が、龍介の恵子に対する氣持を知らない間に強めていった。しかし一方、彼は自分が身体も弱く金もないということの意識でそういう氣持を抑えていった。彼は自分の戀愛をたんに情熱の高さばかりで肯定してゆく冒険ができなかつた。彼にとつて、そんな冒険はできない、というより、そんな「不道德なこと」はできない、といった方がより當つている。そうだつた。そしてその二つが同じように進んでいたとき、龍介は

気軽<sup>ゑん</sup>に女と会えた。恵子<sup>けいこ</sup>はかえつて彼に露骨な好意を見せた。女から手紙が時々来た。「あなたがくる気が朝からしていた。が、とうとうあなたはお見えにならない。胸が苦しくなる想いで寝た」そんなことなど書かれていた。恵子<sup>けいこ</sup>についていろいろな噂<sup>うわさ</sup>が龍介の耳に入った。恵子<sup>けいこ</sup>が淫売<sup>いんばい</sup>をしているということも聞いた。それについて入念な——“Eternal Prostitution” “Periodical Prostituti on” “Five yen a time” というような言葉までできていた。彼はその事について、恵子<sup>けいこ</sup>にたずねた。恵子<sup>けいこ</sup>は——「そんなことでしたら、誰がなんと言おうと私を信じてもらつてもいいの！」と言った。恵子<sup>けいこ</sup>が淫売で拘留されたことがあるとか、家の裏に抜穴があるとか、もつと詳<sup>くわ</sup>しいことが噂立<sup>うわさたて</sup>った。龍介はイライラして

きた。恵子を信じていても、やはりそんなことがいろいろに意識のうちに入ってきて、不快だった。しかしそれと同時に、彼は恵子をすっかり自分のものにした<sup>い</sup>気持ちを感じだしてきた。しつこい強さでできた。龍介は危い自分を意識したが、だめだった。彼の気持はずうと前に行つてしまつていた。彼はそのことを打ち明けるのに、市から汽車に乗つて三十分ほどで行けるZの海岸にしよ<sup>う</sup>と考<sup>え</sup>た。その海岸は眼路<sup>めじ</sup>もはるかなといつていいほど砂丘が広々と波打つていた。よく牛が紐<sup>ひも</sup>のような尻尾<sup>しっぽ</sup>で背のあぶを追いつながら草を食つていた。彼はそこ以外ではいけないと思つた。彼はそこでのことをいろいろに想像した。

龍介は他にお客がなかつたとき恵子に「Zの海岸へ行く」都合



をきいた。言ってしまった、自分でドキまぎした。

恵子は「どうして？」とききかえした。

「……遊びにさ」

「そうねえ——考えておくわ」と言った。

「考える？」

「でも、いろいろ都合があるし……それに主人にも……」

「そう、じゃ二、三日に来るよ」龍介は外へ出たときホツとした。彼は二、三日経て行った。恵子は今度の日曜ならいい、と言った。彼は汽車の時間をきめ、停車場で待つことにして帰った。土曜日はさしあたり必要のない冬服を質屋に持ってゆき、本を売った。それで金の方は間に合った。次の日停車場へ行った。天気

なので、どこかへ出かける人でいっぱいだった。龍介は落ちつかない気持で待合の入口を何度も行ったり来たりした。時計を何度も見た。それから恵子のくる通りの方へも出かけてみた。汽車がプラットフォームへ入った。恵子は来なかった！

龍介は汽車が出てしまったあと、どうしようか、と思ったが、カフェーへ行ってみた。恵子は手拭を「ねいさん」かぶりにして掃除をしていた。彼が入ってくると、行けなかったことを弁解した。彼は今度の日を約束して帰った。約束の前の晩、彼はこの前のようなことがないように、と思い、カフェーへ出かけてみた。女は彼にちょうど手紙を出したところだ、と言い、きゆうにまた明日用事ができて行けなくなったと言った。そして本当に気の毒

そんな顔をした。彼はまたむりをして作った次の日のための金をそこで使ってしまった。帰ったのが遅かった。

二、三日して龍介はまたカフェーへ行つた。そして今度の日曜にはぜひ行こうということにきめて帰つてきた。土曜の暮れ方から雨空になつた。朝眼をさますと土砂降りどしゃぶだった。龍介はがっかりして蒲団ふとんにもぐりこんでしまつた。変な夢ばかりを見て、昼ごろに眼をさました。これで三度だめになつた。そしてこういうことが、彼の気持をもズルズルにさした。彼はその間ちつとも落ちつけず、何んにも仕事ができなかつた。しかし何回ものこういうことが、かえつて彼の恵子に対する気持を変にジリジリと強めていった。彼はまた女のところへ出かけていった。女も「今度こそ

本当にねえ！」と言った。

約束の日まで一週間ぐらいあつた。その間雨ばかり降った。雪がまじったりした。龍介は天気ばかり気になり夕刊の天気予報で、機嫌よくなったり、不機嫌になったりした。自分でもその自分がとうとう滑稽こっけいになつた。土曜日から天気が上つた。龍介は初めて修学旅行へ行く小学生のような気持で、晩眠れなかつた。その日彼は停車場へ行つた。彼は朗ほがらかな気分だつた。が、恵子は来なかつた！ どうすればいいのか？ 龍介は分らなくなつた。

龍介は、ハッキリ自分の恵子に対する気持を書いた長い手紙を出した。ポストに入れるとき、二、三度躊躇ちゆうちよ躊躇ちよちよした。龍介には「ハッキリ」することが恐ろしかった。がこれから先いつまでも

このきまらない気持を持ち続けたら、その方で彼はだめになりそうだった。彼は思いきって、手紙を投げ入れた。そしてハンドルを二、三回廻すと、箱の底へ手紙が落ちる音がした。恵子からの手紙の返事はすぐ来た。冒頭ぼうとうに「あなたは遅かった！」そうあった。それによると最近彼女はある男と結婚することに決まっていた。――

「犬だつて！」犬だつて、これじゃあまり惨めみじだ！ 龍介は誇張なしにそう思つて、泣いた。龍介は女を失つたということより、今はその侮辱ぶじよくに堪えられなかつた。心から泣けた。――何回も何回もお預けをしておいてしまひにあかんべい、だ！ 龍介はこの事以来自分に疲れてきた。すべて自信がもてない。ものをハッ

キリ決めれない、なぜか、そうきめるとそれが変になってしまうように思われた。

……龍介は今暗がりへ身を寄せたとき、犬より劣っている自分を意識した。

## 三

龍介は歩きながら、やはり友だちがほしくなるのを感じた。孤ひとりでいるのが恐こわいのだ。過去が遠慮もなく眼をさますからだだった。それは龍介にとって亡霊だった。——酒でもよかった。が、酒では酔えない彼はかえって惨めになるのを知っていた。龍介は途中、

Sのところへ寄ってみようと思った。

雪はまだ降っていた。それでも、その通りの両側には夜店が五、六軒出ていた。そしてその夜店と夜店の間々に雪が降っているの  
で立ち寄るものはすくなかった。が二、三カ所人ひと集りがあった。  
その輪のどれからか八木節やぎふしの「アツア——ア——」と尻上りにかん勘  
高くひびく唄が太鼓といっしよに聞えてきた。乗合自動車がグジ  
ヨグジヨな雪をはね飛ばしていった。後に「チャップリン黄金狂  
時代、近日上映」という広告が貼はつてあった。龍介はフト『巴里  
の女性』という活動写真を思いだした。それにはチャップリンは  
出ていなかったが、彼ののもので、彼が監督をしていた。彼がそれ  
を見たのは恵子とのことが不快に終ったすぐあとだった。彼には

無条件にピタリきた。彼は興奮して一週間のうちに三度もそれを見に行つた。札売の女が彼を見知り変な顔をした。その写真には不実ではないが、いかにも女らしい浅あさはか薄さで、相手の男と自身自身の本当の気持ちに責任を持たない女のためにまじめな男がとうとう自殺することが描かれていた。そしてそういう女の弱点がかなり辛しんらつ辣にえぐられていた。龍介は自分自身の経験がもう一度そこに経験しなおされていることを感じた。

彼は歩きながら『黄金狂時代』はぜひ見に行こうと思つた。彼がその通りを曲つたとき、ちょうどその角に五、六人の人が立っていた。龍介は通り過ぎる時にちよつと中をのぞいてみた。眼の悪い三十五、六の女が三味線を持って何か言つていた。その前に、



十二、三の薄汚うすぎたない女の子がちよつと前に泣いたらしいそのま  
まのしかめた顔をして立っていた。

「この子は！」年増としまはバチで子供の肩をついた。「さあ、今度は  
唄うねえ、いいかい。——可愛いねえ……」そう言つて、女は三  
味線の箱にさわる手首をちよつとつばでしめすと、しやちこぼつ  
た手つきで三味線をジランジランとならした。「さあ！」女の子  
をうながした。そしてア——ア——とすっかりかすれた声で出し  
をつけてやった。

女の子は両手を袖そでの中にひっこめたまま、だまつていた。  
「また！」年増はさも齒をかんでいるように言った。

女の子は本能的になぐられる時のように頭に手をあげた。

「まあ、この子！」年増はいきなり女の子の背を撥ばちでついた。女の子は足駄あしだをころばすと、よろよろして、見ていた人の足元にのめった。

年増は「ええ、どうも、この子にア、ハア困るんです。へえ、こんなようじゃ二人とも干上りですよ。へへへへ、どう——して、こんな子を持ったのやら、へえ……」と、頭を時々さげて、立っている人の方を見ながら言った。「こうやってるんですけど、今晚は一文にもならないんですよ——この子が……」

誰かが金を投げてやった。眼の悪い年増は首をかしげていたが、笑顔をうかべて、二、三度頭をさげた。

「それ！ 可哀相だと思つてめぐんでくださつたんだ。お礼を言

つて。お金を……」

女の子は金を拾って年増の手に渡した。女は受取ると、それを眼の前にかざして、いくら金の金を手ざわりでしらべた。

「へえ、へえ……どうもありがとうございます」

その時もう一人金をなげた。そして「あんまりいじめるなよ」と言った。彼はそれ以上見ていられなかった。彼は自分が不機嫌に腹の底から興奮してくるのを感じた。雪の降りはひどくなっていた。後から分の分わけらない三味線の音が聞えてきた。

Sはまだ帰ってきていなかった。Sの妹が、龍介が来たら、画を見て帰ってくれと兄に頼まれたと言った。そして、静物を描いた十二号大のキャンバスを持ってきた。Sのお母さんが隣りの室か

ら電燈を引張つてくると画の方にそれを向けて見せた。

「立派です」と龍介は言った。

「どういふもんですかねえ」とお母さんが笑った。

龍介は外へ出るときゆうに自家へ帰りたくなつた。

#### 四

汽車はもうなかつた。龍介は帰りながら、自分の仕事の上で何かすばらしいことがしたいと思つた。彼はいつでもむだにカフェーなどを廻り歩いた帰り、よくそう思つて、興奮した。しかしそれが皆いい加減疲れきつた頭に、反動的に浮ぶ、いわば空興奮で

あるように思われ、淋しく感じた。龍介は一つの長篇に手をかけていた。が、彼自身の生活がグラツツついていたために、それまで変に焦点が決まらず、でき上らないままに放っておかれた。年々上る月給を楽しみに毎日銀行へ行き、月々いくらかずつか貯金し、おとなしい綺麗な細君を貰い、のんきに生活する。そのうちに可愛い子供もできるだろう。そして老後を不自由なく暮す……そこには何ら非難すべき点はない。彼の同僚たちは皆そう考え、そうなるために生活している。しかし、龍介は、そういう生活には大きな罪悪があると思った。もしもこの世の中が完全で、幸福なもので「すべての人がお菓子の食える」境遇にあるものだとしたら、それでいいかもしれない。が、過渡期である。皆は力を合せてま

ず——まず、そういう世の中になるよう、努力しなければならぬ  
い時であろう。が、彼らはそんなことには用事がなかつた。彼ら  
は「自分だけ」は少し辛抱してゆけば、とにかく幸福になれる  
「ところ」にいる、好きこのんで不幸になる必要がどこにある！  
龍介は多くの人たちが、まじめなおとなしい、相当教養ある世  
の中の役に立つ立派な人たちと言っているこれらの人々が、案外  
にも人類歴史の必然的な発展を阻止するそしこの上もない冒涇者ぼうとくしや  
であると思つた。

龍介はそういう者たちの中にある自分の生活に良心的に苦しん  
だ。彼は自分ばかりでなく父のない自分の一家の生活を支えるた  
めに、この虚偽きよぎの生活に縛られていたのだ。ここからくる動揺が

恵子との事にも結びつき、結局、龍介にも何も仕事ができないのだった。

龍介からはこの生活の意識は離れない。しかし「事実の上で」、ここから一步も抜きでない以上、それはただの考えとして檻おりの中の獅子ししのように、頭の中をグルグル廻るにすぎない。龍介はいつものように憂鬱ゆううつになる自分を感じた。そういう気持になる理由がハッキリわかっているだけ、そして「考え」だけの上では結局どうにもぬけでれないということが分っているだけ、たまらなかつた。まるで彼には二進にっちも三進さっちもゆかない地獄だった。そしてこういうことにさんざん苦しくなるといつでも彼は自分でも変に思うほど、かえってでたらめな気持になった。

\*

少しくると龍介はあやふやな気持で立ち止まった。

——彼は自分がズルかったことを意識した。彼は今までちつともこのことには触れずにいながら、潜在意識のようなもので、ここへ来ることを望み、来たのだ。ここは彼のようにルーズな気持を持っていくものくる最後のところだと思ふと淋しかった。彼は立ち止まりながら真直ぐ家に帰ろうと考えた。が、彼は昨夜とその前の晩ちよつと寄つた女の処へ行つてみたい気持の方が強かつた。結局彼はその方へ歩いた。

道の両側には、「即席御料理」「きそば」と書いた暖簾のれんの家が並んでいた。入口に女が立って、通る人を呼んでいた。マントを



着た男がそんな所で「交渉」をしている。龍介を見ると暖簾の間から女が呼んだ。彼はそういう所を通り過ぎた。そしてちよつと行くと、一軒だけ離れて、そんな家がぼつちりあつた。そこだつた。……龍介は二日前ここを通つたのだ。空のはれた寒い晩だつた。入口に寄ると、暖簾のところにながシヨールをして立っていた。入口は薄暗いので顔立ははっきり分らなかつたが、色の白い、十七、八の小柄な女だつた。

「寒い」のれんから首を出して龍介がそう言うと、女は、「寒いねえ」と無愛想に言つた。

二人ともちよつと黙つた。女は彼をじつと見ていた。

「上るの？」

「金がないんだ」そう言つて、「いくらだ」ときいた。

女は龍介の手をつかむと指を二本握らした。「これだけ……」  
龍介の眼から女は眼を放さずに言つた。

「ない」

女は龍介の顔にちよつと眼をすえた。それから「うそでしょう？」と言つた。

「うそは言わない」

また女は彼を見た。

「じゃ……」女は一本指を握らしてから、次に五本にぎらした。

「だめだ」龍介はそう言つた。

女はフンといったようにちよつとだまつたが、首を縮めて、

「寒い」と独言のようにひくくつぶやいた。そして、「いくら持っているの？」ときいた。女は両手を袂たもとの中に入れて、寒そうに足駄をカタカタと小きざみにならした。

「景気はどうだ」

「ひツとりも！」案外まじめさを表面に出して言った。彼はその女にちよつと好意を感じた。「お話しにならないの。主人は……不機嫌になるでしょう……ご飯もろくに喰べさせないワ……それに、……」女は頭を二、三度振ってみせて、「ね、ね」と言った。根元のきまらない日本髪がそのたびに前や横にグラグラした。

「お客さんがないと髪結賃かみゆいちんもくれないの。この髪ずウと前のよ」

「……うん」龍介は髪結賃はいくらだ、と訊たずねようと思った。そ

れぐらいなら出してやつてもいい気がした。

「ね、上るだけの金がなかったら髪結賃だけでもちようだいよ：  
三十銭」女はそう言つてぎこちなく笑つた。そして身体をちよつと振つて、そと外方を見た。

彼はせつかくの気持がこじけて、イヤになつた。その時、家の前を四十ぐらいの貧相な女が彼の方を時々見ながら行つたり来たりしているのに気づいた。龍介は女に、「ない。また来る」そう言つて、戻つた。ほかの人にこんなところを見られたくなかつたからだった。龍介はちよつと来てから道ばたの雪に小用を達たした。用を達しながら、今の家の方を見た。往来をウロウロしていた四十かっこう恰好の貧相な女がさっきの女と、家の側の薄暗いところに立

つて話をしていた。年老とつた方の女が包みから何か出して相手に渡した。若い方はじいとうつむいていた。しばらく何か話していた。

——龍介には分つた！

女のおつ母さんだつたのだと思うと、彼は真赤になつた。そして急いで次の通りへ出た。

次の晩、龍介はもし女がいたら髪結賃をやりうと思つて、そこを通つた。墓がまぐち口から三十銭出すと、手に握つて持つた。歩きながら、ワザと口笛をふいた。そしたら女は顔を出す、と思つた。前まで来たが、出てこなかつた。龍介は往来でちよつと蹲かがんで中をのぞいてみた。いないようだった。彼は入口まで行つた。障子

にはめてある硝子ガラスには半紙が貼はつてあつて、ハッキリ中は見えなかつたが、女はいなかつた。龍介は入口の硝子戸によりかかりながら、家の中へちよつと口笛を吹いてみた。が、出てこない。その時、龍介はフト上りはなに新しい爪つま皮かわのかかつた男の足駄がキチンと置かれていたのを見た。瞬間龍介はハツとした。とんでもないものを見たような気がした。そこから帰りながら変に物足らない気持を感じた。そして何かしら淋しかつた。

しばらくして龍介はオーヴァーのポケットにつっこんでいた右手にしつかり三十銭を握っていたのに気づいた。龍介はいきなり降り積つた雪の中にそれをなげつけた。が、三つの銀貨は雪の中にちつとも手答えらしい音をさせなかつた。

そして今夜で三回だ、龍介はフトそう思うと、何んのためにかう来るか、自分の底に動いているある気持を感じて、ゾツとした。女は外へは出ていなかった。が、足音を聞くとすぐ出てきた。

「兄さん、お寄り……よ」そう言いながら、彼の顔を見て、「この前の……また、ひやかし？」と言った。

「上るんだよ」ちよつと声がかすれた。

「本当？」と女はきいた。

## 五

廊下の板が一枚一枚しのり返っていて、歩くとギシギシいった。

女は座蒲団ざぶたんを持って先に立ちその一番端しの室に彼を案内した。女は金を受取ると出ていった。廊下を行く足音を龍介はじいときいていた。彼はきゆうに身体が顫ふるえてきた。

龍介はズボンに手をつつこみ、小さい冷えきった室の中を歩いた。彼はこういう所に一人で来たこれが初めだった。来たい意思はいつでも持った。夜床の中で眼をさますと、何かの拍子から

「いても立つてもいられない」衝動いんわいを感じることがあった。そうすると口では言えないいろいろ淫猥いんわいなことが平気にそれからそれへととついろどびに彩をつけて想像される。それがまた逆に彼の慾情あおを煽りたてた。が、彼はただ単純に、それだからといってこういう所へは来れなかった。彼は出かけることもあった。が、結局何



もせずに帰った。それは普通いう「道徳的意識」からではなしに、彼の金で女の「人間として」の人格を侮辱ぶじよくすることを苦しく思うことはもつと彼自身にとつてぴったりした、生えぬきの気持からだった。

友だちといつしよにこういう処にくることがあつた。が、彼はしまいまで何もせずに帰る。そんな時彼は友だちに「童貞の古物なんかブラ下げているなよ、みつともない！」と言われる。が、それは彼には当っていないなかつた。彼は童貞をなくすことにはそう未練を持っていない。ただその場合だつて、お互が人格的な関係にあることが、彼には絶対に必要だつた。彼は友だちのように、「商売女は商売女さ」そうはなれなかつた。彼はそういう女をど

うしてもエロチックには感ぜられなかった。すぐその惨めさがきた。それで彼は生理的な発作のようにくる性慾のために、夜通し興奮して寝れないことがあった。こんなことで苦しむのはばかげたことかもしれない。が、プルドーンが、そんな時屋根の上にあがり、星を眺め、気を沈め、しばらくそうしてから室に帰り眠るということを引きいて、同感だった。同じ気持の人がいるかと思うとうれしかった。

彼は顫えがとまらなかつた。何度も室の中を行ったり来たりした。彼は次の間を仕切っている襖をフトあけてみた。乱雑に着物がぬぎ捨てられてある、女の部屋らしく、鏡台がすぐ側にあつた。その小さい引出しが開けられたままになつていたり、白粉刷毛が

おしろいばけ

側に転がっていた。その時女の廊下をくる音をきいた。彼は襖をしめた。

女は安来節やすぎぶしのようなのを小声で歌いながら、チリ紙を持って入ってきた。そしてそこにあつた座布団を二つに折ると××××

(以下略)

龍介はきゆうに心臓がドキンドキンと打つのを感じた。「ばか、俺は何もするつもりじゃないんだ」彼は少しももった。女は初め本当にせず、××××××。龍介はだまって立っていた。

「本当？」

「本当だ」

「そう?……」××××そして、もう一度「本当?」とききなおし

た。女は立ち上った。

女は酒をとり室を出ていった。龍介は室の真中に仰向けにひっくり返った。低い天井板が飴色あめいろにすすけてところどころ煤すすが垂れていた。

龍介は虚ろな気持で天井を見ながら「ばか」声を出してひくく言ってみた。

「ばか！」少し大きくした。そしてその余韻よゐんをきいてみた。するときゆうに大きく「ばかつ!!」と怒鳴りどなたくなった。

女は無表情な顔をして酒を持って入ってきた。口の欠けた銚ちよう子が二本と章魚たこの酢すものと魚の煮たものだった。すぐあとから別な背の低い唇くちびるの厚い女が火を持ってきた。が、火鉢に移すと、

何も言わずに出ていった。

寒かった、龍介はテーブルを火鉢の側にもつてきて、それに腰をかけて、火鉢の端に足<sup>はし</sup>をたてた。

「行儀がわるい」女は下から龍介を見上げた。

「寒いんだよ。それより、君はこれを敷け」彼は女に座布団を押してやった。が、女は「いいの」と言つて、押しかえしてよこした。

「——冷えるぜ」

「どうせねえ」そして、すすめるとまた「いいの」と言つた。

「変だな」彼はそう言つて、むりに女に敷かせた。

「どうして兄さん敷かないの」座つてからも女はちよつと落着か

ないように、モジモジした。それから「じゃ、敷くわねえ」と言  
った。

女は酒をつぐと、

「ハイ」と彼に言った。

「俺は飲まないんだ。君に飲ませるよ」

「どうして？」

「飲みたくないんだ」彼は女の手にさかずき盃を持たしてやった。

「ソお」女は今度はすぐ飲んだ。

龍介は注いでやった。

「本当、いいの？」

「うん」

女はちよつと笑顔えがおをしてのんだ。彼は銚子を下に置かずに注いでやった。女は飲むたびに、「本当？」ときいた。

「この章魚たこも、さかなも食っていいんだ」

彼は割箸わりばしをわって、皿の上に置いた。

「いいの？——何んだか……」

女は少し顔を赤くして、チラツチラツと二、三度龍介を見上げると、「どうして、兄さん……」と言った。

「俺は食わないんだ。いいから」

「ソお、……なんだか……」

女はさかなを箸の先でつつついて、またひくく「いいの？」と言った。そして、最初箸の先にちよんびり肴はさを挟んで左手てのひらの掌てのひらに

それを置いて口にもってゆくとき、龍介をちよつとぬすみ見て、身体を少しくねらし、顔をわきにむけて、食べた。彼はすぐまた酒をついでやった。女はまたさかなを食った。章魚の方にも箸をつけた。腹が減っているんだなあ、と彼は思った。

「いくつだ？」

「——年？」眼にちよつとしたしなを作つて彼を見た。

「うん」

「……十七」

「考えて言えアだめだ」

「本当よ。——十七」

「そうか……章魚がうまいか？」



「……………」返事をしないで女が笑った。

「いつから?……………」

「十五から」

「十五?——」

龍介は酒をついでやった。一本の方はもうなくなつた。彼は女の目の前で銚子を振ってみせた。女はちよつと肩を縮めて、黙つて笑つた。

「まだ、あるんだ。安心せ」

彼はもう一本の方を手にもつて、「さあ、注いでやるぞ」と言つた。そして、「どうしてこんな所へ来たんだ?」ときいた。

女はちよつとだまつた。火鉢のふちにりようひじ両肱を立てて、ちよ

うどさかずきを目の高さにかけていた女は、口元まで持っていたのをやめて、じつとそれに見入った。両方とも少しだまっただと、女は顔をあげて、

「そんなこときいて何するの？」ときいた。そして、

「イヤ！ 私いや！」と言って、頭を振った。

「ききたいんだ」

間。

「どうして？」

「どうしてもさ。金のためにか、すきでか……」

「私言わないもの……」女はきゆうに笑いだした。

「好きで入ったんだろう」彼はちよつと断定的な調子で言った。



「どうして？」本当に分らないできいているようにそう言った。

女は章魚を一つ箸にはさんで口にもつていった。それを口に入れながら、「どうして？」とまた言った。

「君たちの体を……金で……そうだろう？」龍介もそう言いながら赤くなつた。

「お客さんだもの……」

女は単純に答えた。龍介はちよつとつまつた。

「貞操を金で買うんだよ……」

「そんなこと……」

「へえそんなこと……」彼もちよつとそう言わさつた。

「乱暴なお客さんでもなかつたら、別になんでもないわ」

「フーン。初めての時はどうだった。恐ろしくなかつたか？」

「そうねえ……」女は独りで酒をついで飲んだ。「でも、変ねえ、そんなこと、いちいち、なんだか私話すのイヤになった。……」

「大切な女の宝を失くすなのだと思つて……」

「もう話さないもの」女は彼を見て、クスクス笑いだした。

「話してくれ。——」

「イヤねえ。——そう、初めのうち少し極りが悪かつたぐらいよ」

女はブツキラ棒に言つて、「もう何も言わないよ。その代り今度来たら話す」

「——もう来ないよ。その手に乗るもんか」

女は女体を振つておおげさに笑つた。龍介は不快になつた。そ

して女が酒を飲んだりしているのをだまって腰をかけたまま見下していた。首にぬつてあるお白粉がむらになつて、かえつて汚い、黒い感じを与えた。髪はやはりまだ結つていなかった。ものを食うたびに薄く静脈じょうみやくのすいてみえているコメカミが、そこだけ生きてるようにビクビク動いた。

彼は何か言おうとした。が、女がどうしてもピタリしなかつた。龍介はその時女の首筋に何か見たように思った。虱しらみだつた。中から這はいでてきたらしかつた。首筋を明るいところまでくると、ちよつと迷つたともいうふうに方向をかえて、襦袢じゆばんの襟えりに移つた。それから襟の一番頂上まで来ると、また立ち止まつた。その時女が箸を机の上におくと今虱が這いでてきたところが、かゆい

らしく、顎あごを胸にひいて、後うしろくび首をのばし、小指でちよつとかいた。龍介はだまつていた。虱はそれから少し今来た方へもどりかけたが、すぐやめて、今度は襦袢と二枚目の着物との間に入つていった。

龍介はポケットから五十銭一枚をとりだして、テーブルの上へ置いた。

「何アに？」

「髪結賃。この前の……」

そして龍介は「もう帰るよ」と言つて立ち上つた。女も立ち上つた。

「帰ろう」

「そう？　ありがとう。じゃまたねえ」

龍介のあとからついてきた女は、そういうと、身体を二、三度ゆすり上げた。彼は何も言わずに外へ出た。出口でもう一度「またねえ、どうぞ」と女が言った。

龍介は外へ出ると興奮してきた。「誰も」「何も」分っていない、と思った。すべてが無自覚からきている。誰も自分の生活を見廻してみるものがないからだ、と思った。惨めだが、しかしあの女たちはちつとも自分のその惨めなことを知っていないのだ。これは恐ろしいことだと思った。彼は何度も雪やぶの中に足をふみ入れた。しかし、同時に彼は自分に対する反省を感じた。ハッキリ何をしなければならぬかとかいうことが分っていないながら、



ちつともきまらない、あやふやな自分が考えられた。どこかで恵子がこの野良犬のようにほつき廻っている彼を嘲笑あざわらっているように思われた。こういう気持の場合恵子のことを思うことだけでも彼はたまらなかつた。

前から人が来た。彼とすれちがう時に、ハズミで、どしんと打ち当つた。半纏はんでんを着た丈の高い労働者だつた。彼はちよつと振りかへつて見た。男も後を見た。そして「あほう……」と言つた。酔っているらしかつた。

「ばか野郎!! どこをウロついてるんだい、この穀こくつぶし!!」  
しかしそう言つたか、どうか分らない、そう聞いたように思つたその瞬間、彼はきゆうに自分の身体が軽く、ちよつと飛び上つ

たように感じた。眼がクラクラツとした。そして次の瞬間には龍介は道ばたの雪やぶの中に手をつけていた。片方の眼がひどく痛かった。見開くことができなかつた。龍介は高いところから落ちた子供が、息がつまって、しばらくの間泣けないでいるように、動かずにじいとしていた。動けなかつた。彼はしばらくその恰好のままだった。

雪が彼の上にかすかな音をさして降っているのを感じた。が、彼はじいとしていた。





# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」<sup>3</sup> 小林多喜二 徳永直集」集英社

1967（昭和42）年12月12日発行

入力：林 幸雄

校正：浅原庸子

2005年1月16日作成

2014年5月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の夜

小林多喜二

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>